二〇二三年度

普連土学園中学校　入学試験問題

二〇二三年　二月四日実施

国　語

四日午前四科

一、問題に答える時間は六十分です。

二、問題は、問題一　～　問題五　まであります。

三、答はすべて、「解答用紙」に記入しなさい。

四、「解答用紙」は中に二枚はさんであります。

問題一　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

昔から伝わる言葉に、「失敗は成功のもと」「失敗は成功の母」という名言があります。失敗しても、それを反省して欠点をあらためていけば、必ずや成功に導くことができるという深遠な意味を含(ふく)んだ教訓です。

私は大学で機械の設計について指導していますが、設計の世界でも、

「よい設計をするには経験が大切だ」

などということがよくいわれます。私はその言葉を、

「創造的な設計をするためには、多くの失敗が必要だ」

といいかえることができると考えています。

なぜなら人が新しいものをつくりだすとき、最初は失敗から始まるのは当然のことだからです。

人は失敗から学び、さらに考えを深めてゆきます。

これは、なにも設計者の世界だけの話ではありません。営業企(き)画やイベント企画、デザイン、料理、その他アイデアを必要とするありとあらゆる創造的な仕事に共通する言葉です。つまり、①失敗はとかくマイナスに見られがちですが、じつは新たな創造の種となる貴重な体験なのです。

いまの日本の教育現場を見てみますと、残念なことに「失敗は成功のもと」「失敗は成功の母」という考え方が、ほとんど取り入れられていないことに気づきます。それどころか、②重視されているのは、決められた設問への解を最短で出す方法、「こうすればうまくいく」「失敗しない」ことを学ぶ方法ばかりです。

これは受験勉強にかぎりません。実社会でも通用する知識・教養を教える最高学府であるはずの大学での学習もまた同じです。失敗から学ぶ体験実習のように、自分の力で考え、失敗経験を通じて新たな道を模索(さく)する、創造力を培(つちか)う演習が行われる機会は、悲しいかなほとんどありません。これが、「日本人の欠点」として諸外国から指摘(てき)され、また、自らも自覚している「創造力の欠如(じょ)」にそのまま結びついているのではないでしょうか。

たしかに以前は、ほかの人の成功事例をマネすることが、成功への近道だった時代がありました。そうした時代には、決

められた設問に正確な解を素早く出す学習法が有効だったのは事実です。

a、ほかの人の成功事例をマネすることが、必ずしも自分の成功を約束するものではなくなったのがいまの時代です。昨日までの成功は、今日の成功を意味しません。そのような時代に大切なのは、やはり創造力です。そして創造力とは新しいものをつくりだす力を意味している以上、失敗を避けて培えるものではありません。

創造力を身につける上でまず第一に必要なのは、決められた課題に解を出すことではなく、自分で課題を設定する能力です。あたえられた課題の答えのみを最短の道のりで出していく、いまの日本人が慣れ親しんでいる学習法では、少なくとも③いまの時代に求められている真の創造力を身につけることはできません。

それでは、創造的な仕事をする場合、できれば身につけていたい知識とはなんでしょうか？

それを知るためにも、自分が新しい企画を考えるときの様子を想像してみることにしましょう。

あなたはまず、「こうすればうまくいく」という成功話を見聞きしたいと思うかもしれません。たしかに受験勉強などで、ある決められた仕事をこなすためには、「こうすればうまくいく」話はたいへん有効です。しかしあなたはじきに、「こうすればうまくいく」話だけでは不十分だということに気づくでしょう。なぜなら「うまくいく」話をもとにつくった企画は「どこかで見聞きした企画」にすぎないからです。

ではそこで、④本当に欲しくなる話は何でしょうか。それがじつは「こうすればまずくなる」という失敗話なのです。「こうすればうまくいく」といういわば陽の世界の知識伝達によって新たにつくりだせるものは、結局はマネでしかありません。ところが、「こうやるとまずくなる」という陰の世界の知識伝達によって、まずくなる必然性を知って企画することは、人と同じ失敗をする時間と手間を省き、前の人よりも一ランク上の創造の次元から企画をスタートさせることができます。

この⑤陰の世界の知識伝達には、さらに別の大きなメリットもあります。

じつは私もかつては大学の授業で、ある問題に対して決まった解を出す、「正しいやり方」のみを学生たちに指導していました。当時は、知識を身につけさせる上で、それが最短かつ効果的な方法と考えていたからです。

しかし結果として、「正しいやり方」を学んだ学生たちが身につけた知識は、表面的なものにすぎなかったのです。パ

ターン化された既成の問題にはきちんと対応できても、実際に新しいものを自分たちで考えさせてつくらせてみると、こうした知識はほとんど役に立ちません。それ以前の問題として、自分が新たにどういうものを生み出そうとするのか、肝心の課題設定さえ自分の力で行う能力が身についていない学生が数多くいました。

この問題点を解消するために、私は効果的な指導方法をいろいろと模索したのですが、その中で予期しないことが起こり、思いどおりにならない経験から真の理解の必要性を痛感することの有効性に気づきました。

大事なことは、ひとつには学ぶ人間が自分自身で実際に「痛い目」にあうこと、もうひとつは自分で体験しないまでも、人が「痛い目」にあった体験を正しい知識とともに伝えることです。後に詳しく触れますが、「痛い話」というのは、「人が成功した話」よりずっとよく聞き手の頭にも入るものなのです。

このように、陰の世界の知識、すなわち失敗経験を伝えることは、教育上大いに意義のあることですが、残念なことに失敗そのものには、「回り道」「不必要なもの」「人から忌み嫌われるもの」「隠すべきもの」などといった負のイメージが常につきまとっています。そのせいか、いまの日本には、失敗体験が情報として積極的に伝達されることがほとんどありません。

本来は成功を生み出す「もと」であり「母」であるはずのものが、まったく生かされていないのは、非常にもったいないことです。

……　中略　……

人の心は意外に弱いものです。強い負のイメージがつきまとう失敗を前にすると、誰しもつい「恥ずかしいから直視できない」「できれば人に知られたくない」などと考えがちです。失敗に対するこうした見方は、残念ながらいまでは日本中のありとあらゆる場面で見受けられます。

実際、負のイメージでしか語られない失敗は、情報として伝達されるときにどうしても小さく扱われがちで、「効率や利益」と「失敗しないための対策」を秤にかけると、前者が重くなるのはよくあることです。人は「聞きたくないもの」は「聞こえにくい」し、「見たくないもの」は「見えなくなる」ものです。

しかし、失敗を隠すことによって起きるのは、次の失敗、さらに大きな失敗という、より大きなマイナスの結果でしかありません。失敗から目を背けるあまり、結果として、「まさか」という致命的な事故がくり返し起こっているのだとすれば、

⑥失敗に対するこの見方そのものを変えていく必要があります。

すなわち、最近のような事故を防ぐ上でも、やはり失敗とのつき合い方そのものを変えていくことが大きなポイントになります。忌み嫌うだけのいままでの方法には限界があることは、最近になって相次いで起こっている事故を見れば明らかです。そこから一歩進んで、失敗と上手につき合っていくことが、いまの時代では必要とされているのです。

失敗はたしかにマイナスの結果をもたらすものですが、その反面、⑦失敗をうまく生かせば、将来への大きなプラスへ転じさせる可能性を秘めています。事実、人類には、失敗から新技術や新たなアイデアを生み出し、社会を大きく発展させてきた歴史があります。

これは個人の行動にも、そのままあてはまります。どうしても起こしてしまう失敗に、どのような姿勢で臨むかによって、その人が得るものも異なり、成長の度合いも大きく変わってきます。［ b ］、失敗とのつき合い方*いかんで、その人は大きく飛躍するチャンスをつかむことができるのです。

人は行動しなければ何も起こりません。世の中には失敗を怖れるあまり、何ひとつアクションを起こさない慎重な人もいます。それでは失敗を避けることはできますが、その代わりに、その人は何もできないし、何も得ることができません。

これとは正反対に、失敗することをまったく考えず、ひたすら突き進む生き方を好む人もいます。一見すると強い意志と勇気の持ち主のように見えますが、危険を認識できない無知が背景にあるとすれば、まわりの人々にとっては、ただ迷惑なだけの生き方でしょう。

おそらくこの人は、同じ失敗を何度も何度も繰り返すでしょう。現実に、失敗に直面しても真の失敗原因の究明を行おうとせず、まわりをごまかすための言い訳に終始する人も少なくありませんが、それではその人は、いつまでたっても成長しないでしょう。

また人が活動する上で失敗は避けられないとはいえ、それが致命的なものになってしまっては、せっかく失敗から得たものを生かすこともできません。その意味では、予想される失敗に関する知識を得て、それを念頭に置きながら行動することで、不必要な失敗を避けるということも重要です。

大切なのは、失敗の法則性を理解し、失敗の要因を知り、失敗が本当に致命的なものになる前に、未然に防止する術を覚

えることです。これをマスターすることが、小さな失敗経験を新たな成長へ導く力にすることになります。

さらに新しいことにチャレンジするとき、人は好むと好まざるとにかかわらず再び失敗を経験するでしょう。そこでもまた、致命的にならないうちに失敗原因を探り、対策を考え、新たな知識を得て対処すれば、必ずや次の段階へと導かれます。そして、単純に見えるこの繰り返しこそが、じつは大きな成長、発展への原動力なのです。

人の営みが続くかぎり、これから先も失敗は続くし、事故も起こるでしょう。とすれば、これを単に忌み嫌って避けているのは意味がなく、むしろ失敗と上手につき合う方法を見つけていくべきなのです。

（畑村　洋太郎『失敗学のすすめ』　講談社文庫）

〈注〉＊いかんで……「～によって」「～次第で」の意。

問一　文中の空欄 a ・ b に入れるのに最も適当な語をそれぞれ次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　あるいは　　イ　しかし　　ウ　たとえば　　エ　つまり　　オ　もし

問二　――線①「失敗はとかくマイナスに見られがちですが、じつは新たな創造の種となる貴重な体験なのです」とありますが、なぜ筆者は「失敗」が「新たな創造の種となる貴重な体験」になると考えているのですか。本文中の言葉を用いて答えなさい。

問三　――線②「重視されているのは、決められた設問への解を最短で出す方法、『こうすればうまくいく』『失敗しない』ことを学ぶ方法ばかりです」とありますが、このような方法が重視されていたのはなぜですか。「～から。」に続くように、本文中から三十五字以内の部分を探し、初めと終わりの五字をそれぞれ答えなさい。

問四　――線③「いまの時代に求められている真の創造力」とありますが、これを身につけるためには何が必要ですか。本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問五　――線④「本当に欲しくなる話は何でしょうか。それがじつは『こうすればまずくなる』という失敗話なのです」とありますが、新しい企画を考えるときに「『こうすればまずくなる』という失敗話」が「欲しくなる」のはなぜですか。説明しなさい。

問六　――線⑤「陰の世界の知識伝達には、さらに別の大きなメリットもあります」とありますが、「別の大きなメリット」とはどのようなことですか。次のア～オから最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ある問題に対して決まった解を出すやり方を学ぶことで、最短かつ効果的に知識を身につけることができるようになること。

イ　失敗経験を伝えることの教育上の意義を広く理解してもらうことで、失敗そのものに付きまとう負のイメージを解消することができること。

ウ　正しい知識とともに伝えられた、人が「痛い目」にあった体験の話は、人が成功した話よりもずっとよく聞き手の頭の中に入るものであるということ。

エ　他人の「痛い目」にあった体験の話が伝達されることで、学ぶ人間がわざわざ自分自身で実際に「痛い目」にあわなくても済むこと。

オ　パターン化された既成の問題にきちんと対応できるようになるだけでなく、新しいものを自分たちで考えてつくることができるようになること。

問七　――線⑥「失敗に対するこの見方」とありますが、これはどのような見方のことですか。それを説明した次の文の空欄に当てはまる部分を本文中から十四字で抜き出して答えなさい。

失敗には［　　］とする見方。

問八　――線⑦「失敗をうまく生かせば、将来への大きなプラスへ転じさせる可能性を秘めています」とありますが、ここでの「失敗をうまく生かす」というのは具体的にはどうすることですか。本文中から五十五字以内の部分を探し、初めと終わりの五字をそれぞれ答えなさい。

問九　次のア～オについて、本文の内容と合うものには「○」、合わないものには「×」で、それぞれ答えなさい。

ア　与えられた設問に素早く解を出す学習法を身につけることで、失敗した原因を分析することができるようになり、その失敗を生かした新たなものを生み出すことが可能となる。

イ　「失敗は成功のもと」「失敗は成功の母」といった言葉は、「回り道」「不必要なもの」「隠すべきもの」といった失敗の負の側面を安易に否定するものである。

ウ　失敗を恐れて行動しなければ何も得ることはできないので、同じ失敗を何度も繰り返しても恐れずひたすら突き進んでいく強い意志と勇気がこれからの社会の発展のために求められる。

エ　失敗を隠すことはさらに大きな失敗を招くことにもなりかねないので、これまでのように失敗を忌み嫌うのではなく、失敗との上手なつき合い方を考えていくことが、今の時代では必要とされる。

オ　かつて筆者から「正しいやり方」を学んだ学生たちが身につけた知識は表面的なものにすぎず、新しいものを自分たちで考えてつくる際にはほとんど役に立たなかった。

問題二　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

期末テストに向けた勉強会の参加者は、わたしと梢に、クラスメイトの三人を加えた計五人だった。梢以外のメンバーは、同じ班で少年漫画が好きな朋華と、内気な高梨さん、それとつかみどころのないふんいきの沢村さんだ。

これまでのつきあいで、だいたい予想はできていたけど、公民館の自習室の机で真面目に勉強にはげんでいたのは、最初の三十分程度だった。いまでは梢はお腹が空いて集中できないと机に突っ伏し、朋華はノートの隅に漫画の絵を描きはじめている。高梨さんはとなりの図書室に行ったきりで、沢村さんはスマートフォンで心霊写真かなにかの載った不気味なサイトを熱心にながめていた。

こんなに趣味も性格もばらばらなメンバーが、よくいつもいっしょにいるものだ。たまにそう感心したりもするけど、それはきっと世話焼きの梢が、ばらばらなみんなをまんなかでしっかりつないでいるからだろう。

このあと、高梨さんが童話を、朋華が漫画の原作本を、沢村さんがオカルト系の本を、と、なぜかそれぞれがわたしにお勧めの本を紹介する流れになり、最後に梢がお勧めの本を持ってきた。

「じゃあ、あたしはこれで」

最後に梢が絶品スイーツの紹介本を重ねるので、わたしはついふきだしてしまった。

「ちょっと、あたしのときだけなにその反応！」と①不満そうな梢を、朋華がすかさずからかった。

「梢の食い意地にあきれてるんだってば。ねえ美貴」

「そうじゃなくて、梢らしいなって思って……」

「それ、フォローになってないから！」

しかめっ面で指摘してから、梢もこらえきれなくなったように笑った。

テスト勉強はちっともはかどらないけど、まあ、たまにはこういうのも悪くはないかな。ほかのみんなの笑顔をながめて

いるうちに、わたしはそんなふうに思いはじめていた。
けれど②その気持ちは、それからすぐにふっと消えてしまった。梢のすすめてくれたスイーツ本の中に、見おぼえのある写真を見つけたせいだ。
写真に載っていたのは、高級そうな皿に載ったババロアだった。雪のように白いババロアのまわりには、色とりどりの星型のトッピングが飾られ、鮮やかな紅色のソースが、皿にお洒落な模様を描いている。
「いいよねえ、いっぺん食べてみたいわそういうの」
梢のうっとりした声に、わたしはⓐ相槌を打つことができなかった。写真に載ったそのスイーツを、わたしは実際に食べたことがあったからだ。都心にある高級レストランで。まだ半年とちょっとしか経っていない、去年の秋のことだ。
ああ、そうだ。都会の高層マンションに住んで、素敵な私立の学校に通い、たまに高級なレストランに食事に連れていってもらったりもする。ほんの数ヶ月前まで、それがわたしの日常だった。その数ヶ月前が、いまではもう遠い昔のように感じられて、わたしの胸の中は悲しみでいっぱいになった。
わたしはすっかり冷めた気持ちで、写真をじっと見つめていた。すると朋華が突然、「わっ、なにあれ、笹!?」と声をあげた。
朋華が指差すほうを見ると、公民館の玄関に七夕の笹飾りが設置されているところだった。梢が公民館の職員の人に話を聞くと、来館者に願い事を書いた短冊を自由に吊るしてもらう企画らしい。
「どうだい、一番乗りで吊るしてくかい？」
「吊るします吊るします！　わあ、短冊とか吊るすのひさしぶり！」
梢たちがわいわい騒ぎながら短冊を書きだした。梢の短冊は、「みんなをしあわせにする料理人になりたい」。朋華のは「『ヴァイスブレイド』が打ちきりになりませんように」で、高梨さんのは「童話作家になれますように」、沢村さんは「未知との遭遇」だった。
「はい次、美貴の番」
「あっ、わたしは、思いつかないからまたあとで……」
「え――っ、なんかずるいなあ。美貴の願いごとも教えなよぉ」

梢がふざけて問いつめてくる。③だけどみんなに教えられるわけがない。だって、わたしの願いはひとつだけだ。
清凜女子学院に帰りたい。春まで住んでいたマンションで、もとの暮らしにもどって、仲よしだった友達といっしょに、またあの素敵な学校に通いたい。それがわたしの、唯一の願い。親しくしてくれる梢たちには申し訳ないけど、わたしはこの環境に、いまの状況に慣れてしまいたくなかった。
……そんな意地を張ったって、なんの意味もないってわかってるけど。

……　中略　……

「そんなにこの学校の給食が気に入らないわけ？」
はっとしてとなりを見ると、梢が横目でわたしをにらんでいた。なぜにらまれているのかわからず、わたしは戸惑って言った。
「そういうわけじゃないわ。ただ、なんだか食欲がなくて……」
「無理しなくたっていいよ。お嬢様学校の豪華な給食を食べ慣れてるから、こんな貧乏くさい給食は食べたくないんでしょう？」
わたしは耳を疑った。どうして梢が、わたしの小学校のことを知ってるの？　混乱して言葉をなくしていると、朋華が騒ぎだした。
「なになに、美貴ってそんなすごい小学校に通ってたの!?　なんで教えてくれないのよ！」
「あっ、もしかしてあれじゃね？　実は夜逃げしてこっちに引っ越してきたから、言いたくなかったとか？」
冗談めかした足立くんの言葉に、びくりと肩が震えた。けれど動揺はそれだけでなんとかおさえこんで、わたしは平然とした態度で言った。
「……引っ越しは、単に親の都合。けど、貧乏くさい給食を食べたくないっていうのはそのとおりだから、食べたければ遠慮しないでどうぞ」
冷ややかにそう告げると、足立くんは「いや、ああ、悪ィ」と面食らったように、わたしが差しだしたフライドチキンの

皿を受け取った。
そのあとで、わたしは梢の顔をにらみつけた。すると梢はわたしをにらみかえそうとしかけてから、気まずそうに給食に視線を落とした。

「誰に聞いたの」
給食が終わったあと、わたしは空き教室で梢に問いただした。
④梢の態度からは、給食のときのふてぶてしさが消えていた。大きな体を縮こまらせて、梢はぼそぼそとこたえた。
「……美貴のおばあちゃんに。美貴のおばあちゃん、うちのおばあちゃんと友達で、たまに話しにくるのよ。春休みに会ったときに、美貴のことを聞いて、いっしょのクラスになったら仲よくしてあげてくれって……」
信じられない。わたしは思わずそうつぶやいていた。親の会社がつぶれて私立の学校に通えなくなったなんてこと、同級生に知られたら、わたしがどんなにみじめな気分になるか、祖母は考えもしなかったのだろうか。
声が震えてしまわないように、わたしは「そう」と無感情に言った。
「つまり、最初からわたしのことを憐れんで、親切にしてくれてたわけね」
「そんなつもりじゃ……」
言いかえそうとした梢の顔を、わたしはきつくにらんだ。そうしていないと、くやしくて涙がこぼれそうだった。対等と思っていた相手から、ひそかにずっと憐れみを受けていた。そのことはわたしにとって、耐えられないほどの屈辱だった。
「それで、どうしていまさらわたしの事情をばらしたりしたの。朝からわたしに怒ってたみたいだけど、わたし、なにか気にさわることでもした？」
「それは、美貴があんなこと書くから……」
わたしは「あんなこと？」とまゆをひそめた。すると梢は責めるような瞳でわたしを見つめてこたえた。
「……公民館の、七夕飾りの短冊。清凜に帰りたいって、あれ美貴が書いたんでしょ」
ああ、とため息まじりの声がもれた。勉強会が解散したあと、わたしはこっそり公民館にもどって、短冊に願いを書いていた。意味がないことはわかっていても、書かずにはいられなかったのだ。誰にもわかりはしないだろう、と高をくくって

いたのが間違いだった。
まあ、もうどうだっていいけど。そんなふうにⓑ投げやりな気分で考えていたら、梢がうつむいて続けた。
「あの短冊を見つけたとき、すごく悲しかった。あたしはもうすっかり美貴と友達のつもりだったのに、美貴はずっともとの学校に帰りたかったんだって。あたしたちのことなんて、なんとも思ってなかったんだって。それでいらいらして、あんな……」
⑤そう話す梢は本気で傷ついているようで、わたしは動揺してしまった。顔を上げた梢の目には涙のつぶが浮かんでいて、それを見たわたしはとっさに、梢に背を向けていた。
「もういいわ、じゃあ」
わたしは足早に教室を出た。廊下で聞き耳を立てていた朋華のことも無視した。
しばらくしても梢が追いかけてこないのでほっとした。鼻の奥がさっきからずっと熱かったけど、意地でも泣いてやるものかと決めた。
その日の部活は仮病を使って休んだ。梢と顔をあわせたくなかったから。
家に帰ると、玄関先で花の水やりをしていた祖母が声をかけてきた。⑥こっちの気も知らずに、のんきな笑顔で。
「あら、おかえりなさい。きょうは早かったのねえ」
「おばあちゃん、なんでわたしのことを……」
挨拶もかえさずに食ってかかりそうになってから、わたしは唇を強くかんで言葉をせき止めた。ここでこらえなければ、取りかえしのつかないことになってしまいそうな予感があった。きょとんとしている祖母の顔をにらみつけて、わたしは無言で家にあがった。
自分の部屋に引っこむと、カバンを乱暴に放りだして、畳に倒れた。畳のにおいがいつもより鼻について、口で浅く息をしていた。
……　中略　……
次の日から、わたしはひとりになった。教室でも部活でも、誰ともつきあわなくなった。ときどき梢が話しかけようとしてくるのがわかったけど、わたしは頑なに気づかないふりをした。

朋華も高梨さんも沢村さんも、わたしに関わってはこなかった。関わりあいを拒絶する空気を、わたしが発していたせいかもしれないけど、もともと彼女たちは梢の友達だ。梢と仲違いをしたわたしと仲よくする理由はない。

せいせいした。そんなふうに強気でいられたのは、最初のうちだけだった。

清凜女子学院に通っていたころは、友達がたくさんいた。こっちに来てからも、梢がすぐに仲間の輪に入れてくれた。自ら望んでひとりになってはじめて、わたしはひとりでいることの寂しさを知った。

ひとりぼっちのまま数日が過ぎて、七夕の日になった。公立の中学でも、七夕の給食には七夕ゼリーが出るものらしい。それは紙製のカップに入った白いゼリーで、トッピングに星型の小さなゼリーが二個、申し訳程度に載っていた。

「……安っぽい」

わたしは誰にも聞こえない声でつぶやいた。それから、去年までの七夕ゼリーは、と思いだそうとして、もういいかげん嫌になった。

どんなに強く願ったところで、どうせもうわたしは、清凜にはもどれない。だからこうやっていちいちあのころといまをくらべるのは、ただ無意味につらくなるだけだ。

わたしはため息をついて、食パンに塗るイチゴジャムの小袋を開けようとした。するとそのとき、梢が「ねえ」とわたしに声をかけた。

話をする気はなかったのに、反射的にそちらを向いてしまうと、梢は遠慮がちに言った。わたしの七夕ゼリーを指差して。

「それ、くれない？」

わたしは唖然として梢の顔を見つめた。梢は上目遣いにわたしの返事を待っていた。

驚きとあきれがいらだちに変わり、けれど嫌だと返事をするのも癪で、わたしはゼリーのカップを乱暴に梢の給食のトレイに置いた。ありがと、と梢が言ってきたけど、わたしはそれを無視した。

まったく、あきれてものも言えないとはこのことだ。いくら食い意地が張っているといったって、よりにもよってわたしの給食をほしがるなんて。

胸の中で軽蔑の言葉をならべながら、イチゴジャムの袋を千切ると、いきおいよく飛びだしたジャムがトレイを汚して、頭がカッと熱くなった。けれど怒りはすぐに冷えてしぼまり、同時にわたしの心も暗く落ちこんだ。

……どうして、あんなつっけんどんにわたしたりしてしまったんだろう。気づけばわたしはそう後悔していた。しょうがないなあ、と苦笑いでも浮かべて手渡していれば、それをきっかけに梢と仲なおりできたかもしれないのに、と。

強がってごまかすことはもうできなかった。梢と仲なおりがしたい。朋華たちともまた仲よくつきあいたい。それはわたしの本心だった。

たしかに梢はわたしが隠していたことをばらした。だけど、もともと悪いのはわたしだ。最初の理由がなんだって、梢はずっとわたしにやさしくしてくれた。わたしをひとりにしないでくれた。なのにわたしはつまらない意地を張って見栄を張って、梢のことを傷つけて……。

そんなことはもうとっくにわかっていたのに、それでもまだ梢のことを避け続けている自分に、心底嫌気が差した。給食に手もつけず、机の下でぎゅっと両手を握りしめていると、騒々しいまわりの声が急速に遠ざかっていくのを感じた。

自分が泣きそうになっているのがわかった。けれど涙があふれる寸前で、「美貴」とわたしの名前を呼ぶ梢の声が耳に届いた。

梢のほうを向いたときには、無意識にまた不機嫌な表情になってしまっていて、わたしは心の中で自分をなじった。だけどわたしの不機嫌顔は、梢の持った皿を見た瞬間、驚きで塗りつぶされていた。

その皿のまんなかには、カップから丁寧に取りだされた七夕ゼリーが載っていた。しかもゼリーのまわりは、たくさんの星型のトッピングで飾られ、皿にはイチゴジャムでお洒落な模様が描いてあった。

その模様とトッピングのデザインには見おぼえがあった。勉強会のときに見た、高級スイーツの写真とそっくりだったのだ。

「うおっ、なんだその豪華ゼリー！」

足立くんが驚きの声をあげた。すると朋華が横から、「すごいでしょう、梢シェフのスペシャル七夕ゼリーよぉ」と自慢する。

「美貴、これ、美貴に……」

梢がおずおずとゼリーの皿を差しだしてきた。

「えっ、なんでわたしに……」

「その、この前のお詫びにっていうか……美貴、すごく怒ってるだろうから、どうしたら許してもらえるか、みんなに相談したんだ。そしたら朋華がアイデアを出してくれて……」
梢が横目でとなりの朋華を見た。わたしもつられて朋華に視線を移すと、朋華はしたり顔で言った。
「ほら、お金で買ったものをあげるのもなんか違うでしょ、この場合。それでいろいろ考えたんだけど、このあいだ美貴があの高級スイーツの写真をすごく熱心に見てたから、こういうのなら喜んでくれるんじゃないかなあ、って思って」
わたしは言葉を失ったまま、再び梢の顔を見た。梢は目を伏せて、わたしに謝ってきた。
「この前は、ごめん。美貴がつらいのはわかってたのに、勝手にいらついて、美貴が秘密にしておきたいことをばらしたりして……」
「違う、梢はなにも悪くない。なのにお詫びなんてもらえないわ」
わたしはとっさにそう言っていた。けれど梢は、「いいから、あたしが美貴にあげたいの。だから、はい」と、ゼリーの皿を差しだしてくる。
わたしはためらいがちにその皿を受け取った。ゼリーを飾る星型のトッピングは、全部で十個あった。トッピングはひとつのゼリーに二個。梢と朋華のゼリーからは、トッピングがなくなっていた。さらにとなりの班に目をやると、高梨さんが恥ずかしそうにほほえみ、沢村さんがいつもの無表情のまま親指を立ててみせた。それを見たわたしは、もう涙をこらえきれなくなってしまった。
「どうよ美貴、こんなデザート、さすがに前の学校でも出なかったんじゃないの？」
朋華のおどけた科白に、わたしはうん、とうなずいた。当たり前だ。こんな特別なメニュー、どんな学校の給食だって、食べられるわけがない。
「ありがとう……それに、ごめんなさい」
ずっと言えなかったその言葉が、自然とわたしの口からこぼれた。にじんだ視界で梢の顔を見つめると、⑦梢はほっとしたような笑みを浮かべていた。
足立くんがわざとらしく聞いてきた。
「いやあ、すっげえなあ、それ。おれのと交換しねえ？」

「……だめ、これは絶対あげない」

涙まじりの笑顔でこたえると、わたしはゼリーをスプーンですくい、イチゴジャムのソースをつけて口に運んだ。

甘酸っぱい味と、ひんやりした食感が口の中に広がる。その味と食感を大切に味わってから、わたしは「おいしい」とつぶやいた。⑧この学校に来てから、給食をおいしいと感じたのはこれがはじめてだった。

きょうの部活が終わったら、とわたしは思った。きょうの部活が終わったら、帰り道に公民館に寄って、七夕飾りの短冊の願いごとを書きかえよう。それから図書室で、みんなにすすめてもらった本を借りることにしよう。

七夕ゼリーのまわりに飾られた星型のトッピングを見つめて、わたしはそう心に決めた。

（如月　かずさ『給食アンサンブル』　光村図書出版）

問一　═══線部ⓐ「相槌を打つ」・ⓑ「投げやり」の文中での意味として最も適当なものをそれぞれ下のア～オから選び、記号で答えなさい。

ⓐ　相槌を打つ

ア　相手に意見を言う
イ　相手に手の内を明かす
ウ　相手の話に調子を合わせる
エ　相手をあしらう
オ　相手を放っておく

ⓑ　投げやり

ア　物事に気を配る
イ　物事に距離を置く
ウ　物事に無関心になる
エ　物事をいいかげんに行う
オ　物事を真面目に考える

問二　――線①「不満そうな梢」とありますが、「梢」は何に対して「不満そう」なのですか。答えなさい。

問三　――線②「その気持ちは、それからすぐにふっと消えてしまった」とありますが、見覚えのある写真を見つけたことで「その気持ち」が「消えてしまった」のはなぜですか。答えなさい。

問四　――線③「だけどみんなに教えられるわけがない」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問五　――線④「梢の態度からは、給食のときのふてぶてしさが消えていた。大きな体を縮こまらせて、梢はぼそぼそとこたえた」とありますが、どうして「梢」はこのような態度になってしまったのですか。この説明として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい

ア　「わたし」が落ち着いて話してかけてきたので、仲直りしようと思い始めていたから。

イ　「わたし」が自分の顔をにらみつけてきたことで、恐怖（きょうふ）を感じたから。

ウ　「わたし」に怒（いか）りをぶつけることができ、あとはもうどうでもいいと思ったから。

エ　「わたし」に自分のいらだちをぶつけたことを、申し訳なく思ったから。

オ　「わたし」の冷たい態度に接して、もう友達として関わることはできないと思ったから。

問六　――線⑤「そう話す梢は本気で傷ついているようで、わたしは動揺してしまった」とありますが、「わたし」は何が「梢」を傷つけたと思ったのですか。答えなさい。

問七　――線⑥「こっちの気も知らずに、のんきな笑顔で」とありますが、この時「わたし」は「祖母」にどのような思いを抱いていたのですか。この説明として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　親の都合で転校することになり、みじめな思いを抱えて日々を過ごす「わたし」を憐れんでいる祖母を、憎らしく思っている。

イ　傷ついた「わたし」の様子に気づいたようでありながら、いつもと変わらずのほほんと声をかけてくる祖母に、反感を抱いている。

ウ　自分が親切で話したことが、かえって「わたし」を傷つけることになってしまい後悔している祖母を、痛々しく感じている。

エ　仲良くしてあげるよう前もって伝えておいたから、学校の友人達とはうまくいっているはずだと満足そうな祖母に、あきれている。

オ　「わたし」が一番知られたくないことを、学校の友人達に伝わるようにしゃべってしまった無神経な祖母に、怒りを抱いている。

問八　――線⑦「梢はほっとしたような笑みを浮かべていた」とありますが、「梢」が「ほっとした」のはなぜですか。説明しなさい。

問九　――線⑧「この学校に来てから、給食をおいしいと感じたのはこれがはじめてだった」とありますが、これは「わたし」のどのような心情の表れですか。説明しなさい。

問題三　次の①～⑩の――線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

① 日本人はショサが美しいと海外からもほめられている。
② 知り合いの人にシャクヤを紹介してもらう。
③ 新しい法案を通すため会議で決をトる。
④ 静かなゾウキバヤシの中を散策する。
⑤ 祖父の家のエンガワで線香花火をする。
⑥ 彼の顔はまるで悪魔のような形相だった。
⑦ この参考書は学生たちに重宝されている。
⑧ 勇気を奮い立たせて肝試しの会場へ向かう。
⑨ 父は田舎ぐらしにあこがれている。
⑩ 彼は学問を究めた偉大な人物だ。

問題四　次の①～⑩の【　】に当てはまる最も適当な語を、後のア～ソから選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 差し向かいで囲碁を【　】。
② 休日に父と将棋を【　】。
③ 兄と相撲を【　】。
④ あれこれと弟の世話を【　】。
⑤ 映画の迫力に息を【　】。
⑥ 叱られるのではないかと気を【　】。
⑦ 満点を取って調子に【　】。
⑧ 悪い評判が【　】。
⑨ 杵を持って、臼で餅を【　】。
⑩ 肩で風を【　】。

ア うける　イ うつ　ウ かける　エ かる　オ きる
カ さす　キ たつ　ク つく　ケ とる　コ なる
サ のむ　シ のる　ス もつ　セ もむ　ソ やく

問題五 次の①～⑤の意味・用例に当たる三字熟語を、それぞれ後の（　）内の漢字を用いて完成させなさい。なお、用例の「――」部分には、その三字熟語が当てはまります。

① 感情や緊張（きん）がもっとも高まった様子。「――に達する」
（紅　高　頂　最　際　潮　調）

② ここぞという大事な場面や局面。「むこう一週間が――だ」
（正　生　年　念　面　馬　場）

③ うまく後始末をつけるための手段。「――を講じる」
（全　作　前　後　策　善　誤）

④ 文書で表現されていない法。暗黙（もく）の了解（りょう）。「我（わ）が校の――」
（分　文　不　付　負　律　率）

⑤ その物事を専門にしていない人。「料理に関しては――だ」
（外　官　門　害　問　漢　関）